

千葉に建築を訪ねる

六 石井和紘のファンタージェン

建築家 三沢 浩

その昔「船橋ヘルスセンター」から海が見えた頃、レーモンド事務所に入ったばかりの夏の社員慰安旅行が、この海辺の潮干狩りであった。簀の子で囲い、魚を放して生け捕り



にして遊び、潮干狩りはそのので、繫いであった和船で、船頭の揚げる天ぷらを食べた。戦後一〇年目ではこんなことがまだレクリエーションだった。その帰りは「ヘルスセンター」を抜ける。畳の大広間が幾つもあって、浴衣姿の年寄りが交互にステージにあがって歌を歌う。カラオケの前身だが、音楽はなく、単なるのど自慢大会である。これを事務所の綿々は横目で見て素通りしている。合わなかったのだろし、主旨が違っていたのだろし。ヘルスセンターはそれが見納めであった。

それが「ららぽーと」に変身する。アメリカ型巨大ショッピングセンターである。そこう百貨店が入り、ダイエーがキーテナントとして両端を占め、中庭をつくって、その周辺にレストラン群を配置する。子供を連れてここに行ったのは一八年前のこと。レストランが混みあつてウェイターの態度が悪くて、腹を立てて食うのをやめたとび出した。子供連れにカウンターで食えというのは土台無理な話だが、それ以来、家族に食事を共にすることを敬遠されることになっていった。

「ららぽーと」は「母さん買物、父さん賭け事」のように船橋競馬場と抱き合わせで売ったようだが、やがて南の海側を埋立て、ゴ

ルフ場をつくり、「ザウス」をつくってさらに遊びを加え盛んになった。その巨大施設の中庭に埋め込むようにしてでき上がったのが「サンリオ・ファンタージェン」(Sanrio Fantasy)である。この年の前後に日本全国で博覧会が開かれ、テント構造は一躍、主役になった感があった。私も「横浜博覧会」で「開港記念村」の設計者に抜擢されて、全村をテント構造で覆ったのが一九八九年のことである。しかもこの年辺り、「ポストモダンイズム」の流行と相まって、様々な引用、引喩、様式の再現が巷に溢れていた。時はまさにバブルの真只中に入りつつあったその時代である。

「開港記念村」は横浜の明治・文明開化の象徴が並ぶ筈だった。そこで「本家めぐり」と銘打ってアメリカ東部の都市を視察し、ついでにアメリカの昔に夢を求めた「デイズニワールド」にも足をのばし、アメリカの町並みの再現を確認もした。横浜の当時の建物の再現ではなく、「ポストモダン建築風」な引用や、模倣が必要だった。そこで出来たばかりで噂にも聞いていた「サンリオ・ファンタージェン」を所員と見に行ったのである。

直径約一〇mの円形のテントの下にドイツのロマンチヒ・ストラッセ、つまりロマンスの後、彼とは一度も会ったことはない。

「サンリオ・ファンタージェン」は、石井の幾つかの作品の中では珍しく、商業建築であり、子供の城のようでありながら真面目につくったことが、よく表われた作品であるといえる。だから彼は茶室に始まり、自宅にも自己流茶室をつくり、そこでサクスを吹き鳴らす両用の構えが常にある。これを器用と云うのかは分からないが、有り余る才能を充分に人の目に見せてきたことは事実だった。

新しい時代の生きる術を心得ていることは分かるが、今まで示してきたような、個人住宅を含めた荒技を、よくぞ友人たち、施主たちが受け止めてきたものと感心する。これこそ彼の人柄というべきか、人格そのものというべきか。「真島福祉会館」の説明で最近の動向を誌上で読んだのだが、いかに真島の町長と親しくて、その公共建築の殆どを手掛けたとしても、議会では反対の声もあつたとい、三〇年間に四回は拒否の目にもあつたとい、狭い島の中では大変なことだつたらう。当然の反対論をいかに収めてきたのか、これも建築家の業ということである。反対は真島だけではないのだから。(続)

街道で有名なローテンブルグの町並みが再現され、入口まで石の門を模造品でつくり、何となくおもちゃの国が小さいながらも出来上がっていたのを見た。ローテンブルグは第二次大戦で連合軍に八〇％を破壊され、戦後二〇年をかけて戦前と全く同じ町並みに復原したことで有名である。絵はがきまで頼りにして、正確に戻っていったといういわくがある。中心に高い市役所の塔があり、サンリオでも中心の塔を模して、その頭からテントでその町並みを覆ったのである。ローテンブルグも色は鮮やかだが、ここはサンリオ天国だから特に子供向けに明るく鮮やかにしているし、描いた木造の町並みが、まさに「ポストモダン」的であった。この辺はデイズニランドのメインストリートにも似た所がある。

この当時、設計者石井和紘は四四才、一五年前にイエールと瀬戸内海の真島を往復したり、イエールにいたポストモダンの旗手チャールズ・ムーアを真島に案内したり、そしてその結果、まさに「ポストモダンイズム」の日本の旗手になった感があつた。偶然から手の中にした、煩惱払いの一〇八の鐘の音を半分にした五四を窓に用い、屋根に用い、ここでは家並みは二〇位しかないが、彼の頭の中に